

り、源頭の雰囲気となる。細いナメ床はなおも続くが、もう小さな溝状にすぎず、水もほとんどなくなったところで引き返す。

この沢の源頭部は、たくさんのゴミが目についた。自衛隊の廃棄物である。ジュースの缶からウイスキーのびんをはじめとして、古タイヤ、オイルの缶、ガスボンベ、長靴まで、種々雑多のゴミが散乱していた。演習地内における自衛隊員のマナーはなっていない。

[タイム] 出合(5:45)→二俣(6:35)→遡行終了(6:55)

一ノ沢(仮称)右俣 1987年8月15日

7:20遡行開始。左俣と同じくナメが続くが、小滝が出てくるところだけ変化がある。それ以外なんということもないまま源頭の二俣となり、右沢に入る。

すぐ源頭となり、7:40遡行終了。

(計)

[タイム] 二俣(7:20)→遡行終了(7:40)

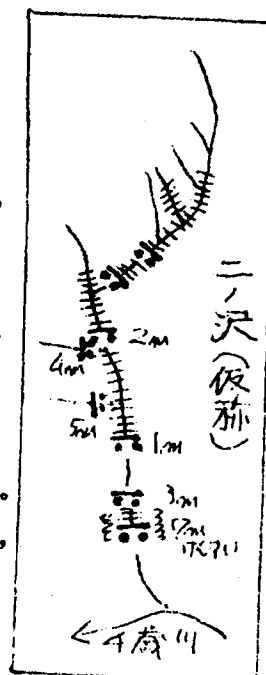
二ノ沢(仮称) 1987年8月15日

8:05下降開始。すぐ湿地状になり、そこを5分ほど下るとはっきりした沢の形をとるようになる。そしてすぐナメとなる。

支沢を次々に合わせ、次第に水量も多くなり、沢幅も広がってくる。やがてゴルジュとなる。ここに滝がかかる。最初の3mは、シャワーでクライミングダウン。そのあと7mの滝。この滝は下れず、ザイルを出して懸垂下降する。

滝を下った所で小休止する。この下はもう平凡な河原で、5分も歩くと本流との出合であった。

[タイム] 下降開始(8:05)→下降終了(9:00)



13:05下降開始。最初は湿地状になったなかを進む。やがて小さな流れが出てきて、ナメとなる。ここから左俣出合まで、ナメが断続しながら支沢を合わせて次第に沢幅が広がり、水量も多くなってゆく。

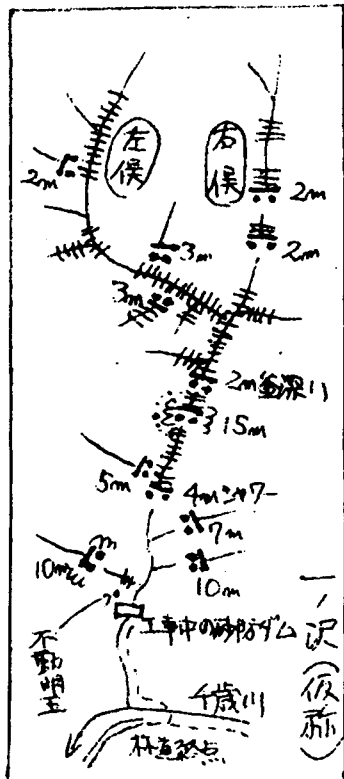
13:40二俣。このあとはナメをどんどん下り、滝は右岸を捲いて下る。14:30下降終了。左岸の踏跡をたどって楽翁溪林道へと出る。 (記・

[タイム] 下降開始(13:05)→二俣(13:40)→下降終了(14:30)→楽翁溪(15:05)

一ノ沢(仮称)左俣

1987年8月15日

楽翁溪林道終点から一ノ沢(仮称)ぞいに砂防工事用の林道がのびている。この林道の終点では現在砂防工事が行われている。工事中の砂防ダムのわきに不動明王を祀る小さな祠がある。ここで合流する支沢には10m程の滝がかかる。右岸を見上げると大きな岩塔。先を期待させる出だしである。5:45遡行開始。



少しの間は平凡な河原が続く。しかし左岸から合流する2本の支沢にはやはり10mクラスの滝がかかっている。やがて4mの滝。この沢で最初の滝である。右岸をシャワーで直登するが、ホールドが少なく、少し緊張した。

つづいてこの沢最大の15m滝。左右とものおっぺりとした岩場がガッチリガードしていて、直登はととも無理。かといって、捲くのも容易でない。右岸に取り付き、樹林帯の中を半ば岩登りのような形で100mほど登り、岩塔の基部をトラバースしてから沢に降りる。どうもここあたりの岩場は、おっぺりとしてホールドに乏しいようである。

沢に戻るとナメとなり、すぐ小滝が出てくる。この小滝、釜が深く右岸から捲くようにして越す。このあとすぐ二俣となり、左俣に入る。

左俣は、まるで舗装道路を思わせるようなナメが続く。そして支沢を分けるごとに水量が少なくな